

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 イカナゴ類

学名 *Ammodytes personatus* (イカナゴ)
A. hexapterus (キタイカナゴ)

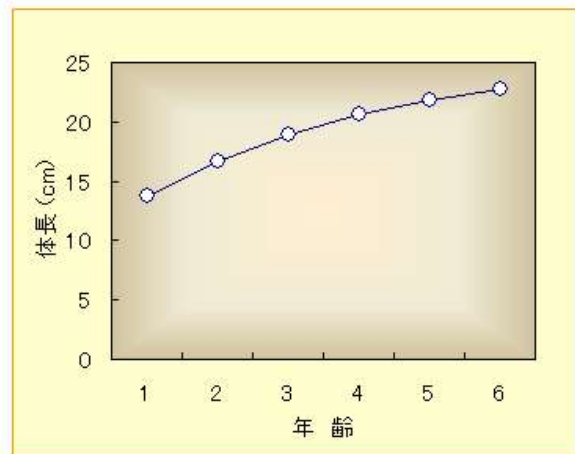
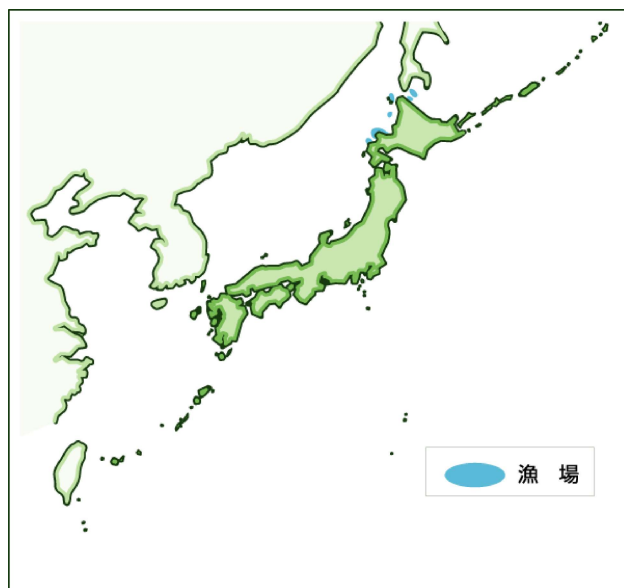
系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特徴

- 寿命： 6歳以上
- 成熟開始年齢： 2歳
- 産卵期・産卵場： イカナゴは春（3月下旬～5月下旬）で、稚内、枝幸および利尻礼文島周辺の沿岸域、キタイカナゴは初冬（11月下旬～12月）で、サハリン周辺の沿岸域
- 索餌期・索餌場： 主に宗谷海峡周辺の水深40～80mの砂礫地帯
- 食性： 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類、珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、矢虫類、魚類
- 捕食者： マダラ等の大型の魚類、海鳥類、海産ほ乳類

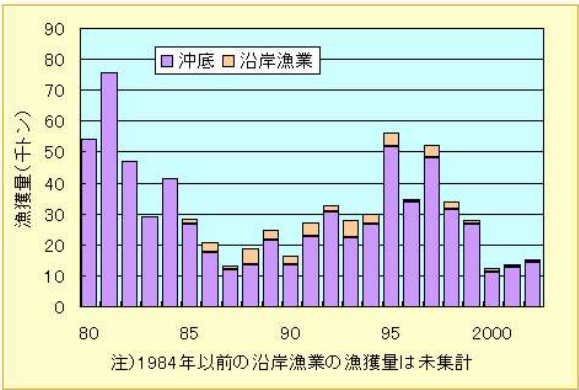
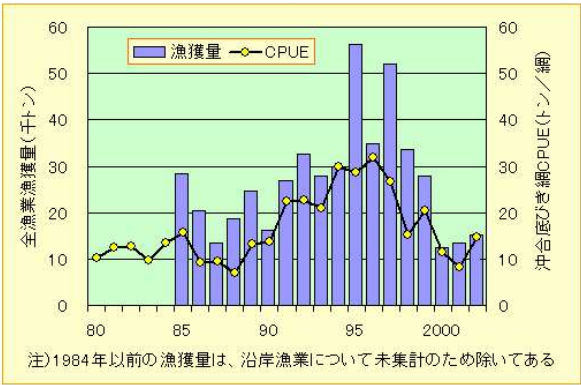


漁業の特徴

宗谷海峡周辺に分布するイカナゴ類には、イカナゴとキタイカナゴの2種が含まれているが、漁獲物では分離されていない。これらイカナゴ類は、小型定置網、すくい網、敷網などの沿岸漁業でも漁獲されるが、大半は沖合底びき網（沖底）によって漁獲される。沖底漁業は、例年6～9月に、主に宗谷海峡東方海域で、1～6歳魚の索餌群を漁獲対象として行われる。また、沖底漁業は、ハマチの餌としての需要を考慮しながら行われる。一方、沿岸漁業は、毎年4～7月に、0～3歳魚を漁獲対象として行われる。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1981年のピーク以後減少傾向を示し、1987年には11,962トンに落ち込んだ。しかし、その後は増加傾向に転じ、1995年には51,731トンに達した。近年、再び減少傾向にあったが、2001、2002年には若干増加し、2002年の漁獲量は14,521トンであった。一方、沿岸漁業では、毎年数百～数千トンの漁獲があり、2002年の漁獲量は739トンであった。

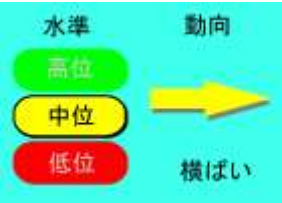


資源評価法

沖底漁業は、需要を考慮しながら行われるため、その漁獲量は、資源水準を直接に反映するものではない。そのため、沖底のCPUEの経年変化から資源状態を判断した。しかし、宗谷海峡周辺のイカナゴ類は、ロシア水域とまたがって分布しているため、日本漁船のCPUEの動向が、どれほど当該資源全体の動向を反映しているかは不明である。

資源状態

沖底のCPUEは、1989年以降増加傾向を示し、1996年には1980年以降最高の約32トン／網に達した。しかし、1997年以降は減少傾向に転じ、2001年には約8トン／網に落ち込んだ。その後、2002年には約15トン／網に増加し、過去20年間（1983～2002年）で11番目に高い値となった。したがって、資源水準および動向は、それぞれ中位で横ばいと判断した。



管理方策

資源状態は中位で横ばいと判断された。また、日本漁船の利用可能な漁場がかなり制限されていることから、沖底漁業が、宗谷海峡周辺のイカナゴ類資源全体に与える漁獲圧は低いと考えられる。したがって、現在の漁獲を維持すれば、資源に悪影響は与えないと判断し、ABClimitは2002年の漁獲量とした。また、ABCtargetは、ABClimitに安全率である0.8を掛けた値とした。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	15千トン	Ccurrent	-	-
A B C target	12千トン	0.8ABClimit	-	-

資源評価のまとめ

- 沖底のCPUEの経年変化から資源状態を判断

- 沖底のCPUEは近年減少傾向にあったが、2002年には約15トン／網に増加したため、資源水準は中位、動向は横ばい

資源管理方策のまとめ

- 日本漁船の利用可能な漁場は制限されていることから、沖底漁業がイカナゴ類資源に与える漁獲圧は低いと判断
- ABClimitは2002年の漁獲量、ABCtarget はABClimitの0.8倍

資源評価は毎年更新されます。